

全国
神社総代のすゝめ



全国神社総代会

〒151-0053 東京都渋谷区代々木1-1-2
TEL 03-3379-8011 FAX 03-3379-8299

発行:令和3年7月

祈りの心と神社

山や海の近く等全国の至る所に約八万社の神社が鎮座しています。この風景は日本独特のものであり、神社を中心とした信仰が神道です。

私たちの祖先は自然と関わりながら生きていく中で、清浄な山や岩、木や滝などの自然物に神々が宿るものとしてまつりました。やがてまつりの場に建物が建てられ、祈りの場である神社が誕生しました。

古くから現在に至るまで、神社のお祭りは連綿と続けられてきました。人々は日々の神恩に感謝をして、様々な祈りを捧げてきました。祈りの本質は今も昔も変わっていません。この祈りの心、そして祈りの場であり、地域の中核を担ってきた神社を次世代に繋ぐことが今を生きる私たちに必要とされています。



お祭りの準備と心得について

神社の総代として神職を補助して祭典の準備や奉仕を行う場合、事前に神社のお祭りの由来や伝統を理解し、宮司と祭典を齎行する日程や準備品の確認、打ち合わせを行うことが大切です。また、その準備は漏れがないように行います。また神職と同様にお祭り前には、言動や動作を正しくして、心身の健康に努め、不浄に触れずに清浄を保つ心構えを持ってお祭りに奉仕・参列します。また、お祭りに参列する場合は神様に対して不敬にならないような服装(略礼服・スーツ等)で参列しましょう。

お祭りの準備の一例

(神社の恒例祭典、七五三、各種祈願等)

- 当日は社殿、境内を清掃し祭典を行うに相応しい場所とする。
- 祭典に必要な祭器、神饌、玉串等の準備、確認を行う。
- 祓所や手水所の準備を行う。
- 直会、御下がり(徹下品)の準備を行う。

神社総代の皆様へ

神社総代の職務は、お祭りの準備の手伝い、祭典の助勢や参列、神社の清掃をはじめとした管理、氏神社のお神札と神宮大麻の頒布活動、氏子の教化育成、神社の奉賛活動や氏子費の集金、ご祭神のご神徳を広めたりと多岐に亘る活動に寄与します。神社総代はその地域の氏子・崇敬者の代表としてよく宮司に協力することが出来る方が就任します。また総代の存在は、神社の維持・運営を円滑に行うための唯一無二の存在であり、特に神職が常駐していない神社においては必要不可欠なのです。

神社が古くより伝えてきた伝統を継承し、宮司の良き理解者として、一致協力して祭祀の振興や神社活動の充実を図ることが総代の重要な務めとなります。

したがって、総代の神社における役割を十分に理解し、前任者から総代の業務を引き継ぎ、退任する際も後任にしっかりと引き継ぎを行うことが大切になります。



お祭りの種類について

年間を通じて神社では様々なお祭りが行われます。規模に応じて大祭、中祭、小祭に区分されています。

- 大祭** (例祭、祈年祭、新嘗祭、式年祭、遷座祭、合祀祭、その他神社に特別の由緒ある祭祀等)
- 中祭** (歳旦祭、元始祭、紀元祭、天長祭、昭和祭、神嘗奉祝祭、明治祭、その他これに準ずる祭祀及び神社に由緒ある祭祀)
- 小祭** (大祭及び中祭以外のお祭り 例 月次祭、日供祭等)

特に重要なお祭り

神社の特に重要なお祭りに例祭、祈年祭、新嘗祭があります。

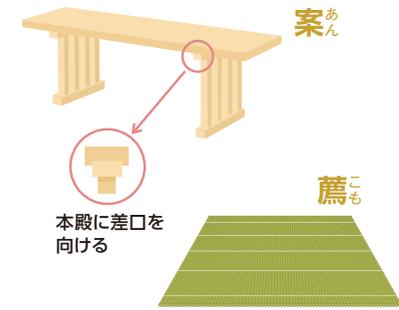
例祭 神社にとって最も重要なお祭りであり、ご祭神に関わりのある日や神社の創建日等その神社にゆかりの深い日があつていきます。

祈年祭 二月十七日に行われるお祭りです。皇室の弥栄と国家・国民の一年の安泰、稲の豊穰をはじめあらゆる産業の発展と国力の充実を祈るお祭りです。

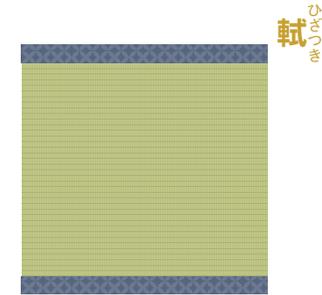
新嘗祭 十一月二十三日に行われるお祭りです。新穀の収穫を感謝して皇室の弥栄と国家・国民の安泰を祈るお祭りです。

祭器具について

祭典には祭器具が必要であります。ここでは主に使用する祭器具の名称と形状をイラストで紹介します。



- 案は神饌や玉串等を載せる机状の台のことです。
- 薦の上に案を置きます。



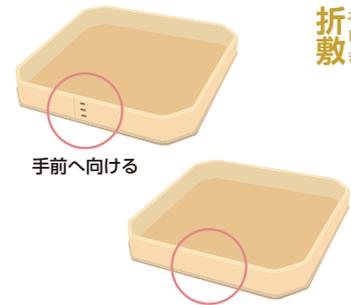
神前で用いられている敷物で、跪いて座するときに使います。



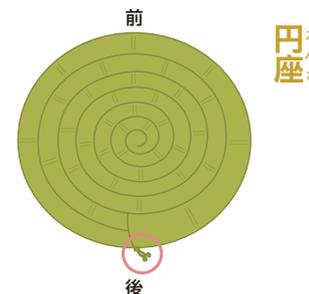
- 腰掛の一種であり、脚を交差させて折り畳めるようにしたものです。
- 交差した外側の足の下部を前にします。



神饌を載せて供える際に用います。供える際は縁の綴目を手前に向けます。



お供えを載せて供える際に用います。供える際は縁の綴目を手前に向けます。



渦巻き状にまるく編んだ敷物です。

祭器具の取り扱い方について



三方の持ち方

親指を左右の縁の外側に、他の指と手のひらとを裏に当てて、目の高さに捧げ持ちます。



折敷の持ち方

親指を左右の縁の外側に、他の指と手のひらとを裏に当てて、目の高さに捧げ持ちます。

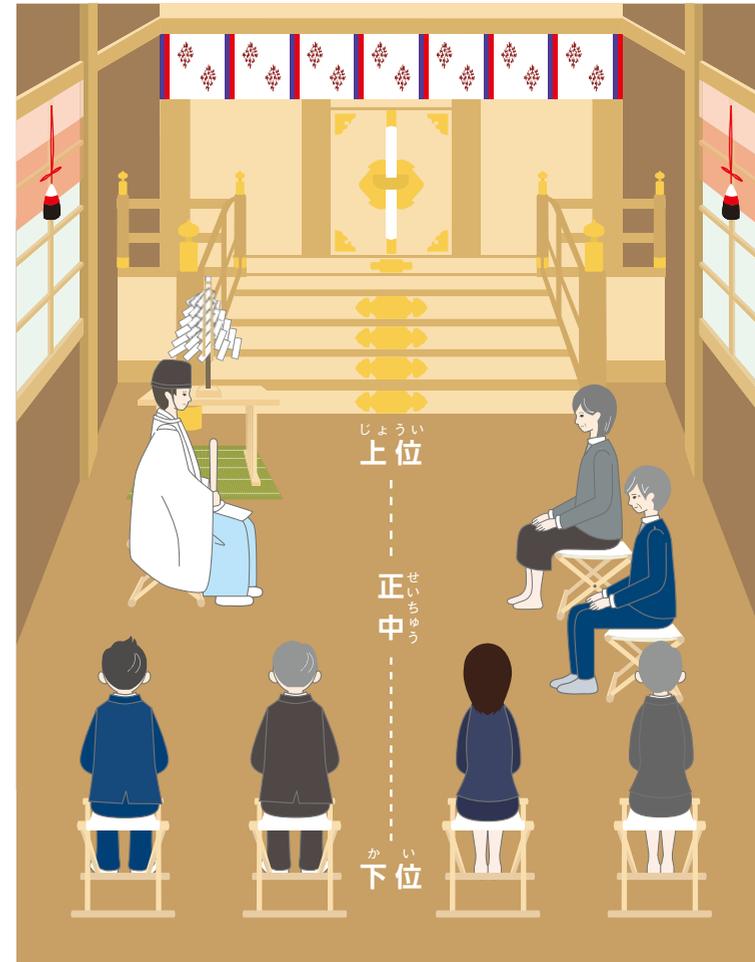
コラム 鳥居について

私たちが神社にお参りする時、まず目にする鳥居は、神社の神聖さを象徴する建造物と言えます。鳥居は神社の内と外を分ける境に立てられ、鳥居の内は神様がお鎮まりになる神域です。

鳥居は、その材質・構造も多種多様で、それぞれの神社により形態が異なります。



祭場の位次について(一例)



ご神座に近い方を上位(尊き)、遠い方が下位であります。ご神座の中心から正面前方への延長線を正中と言います。ご神座に次ぐ上位(尊き)であり、神前に向かって右を次とし、向かって左をその次とします。

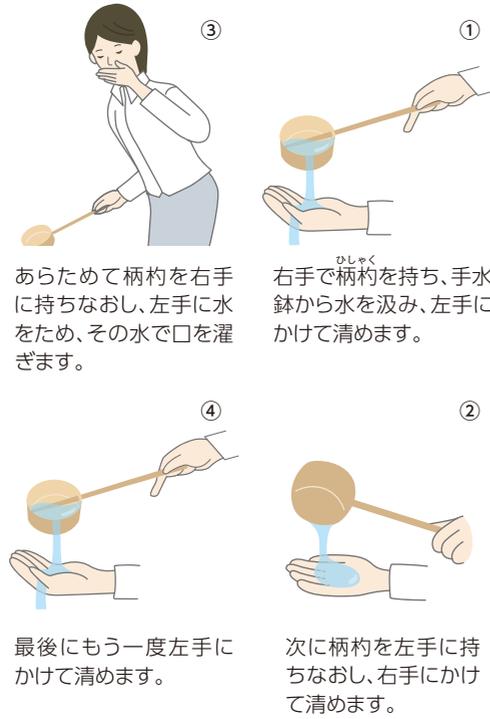
具体的な進退の作法としては、

一、正中の場合 左足から進み、右足から退きます。

一、正中以外の場合 下位の足から進み、上位の足から退きます。

下位の足から立ち上がり、上位の足から坐ります。

手水の作法について



① あらためて柄杓を右手に持ちなおし、左手に水をため、その水で口を濯ぎます。

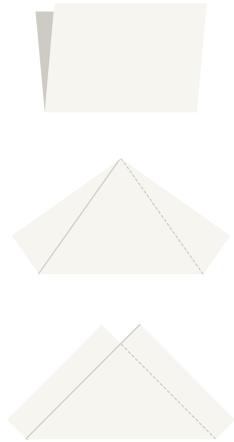
② 右手で柄杓を持ち、手水鉢から水を汲み、左手にかけて清めます。

③ 最後にもう一度左手にかけて清めます。

④ 次に柄杓を左手に持ちなおし、右手にかけて清めます。

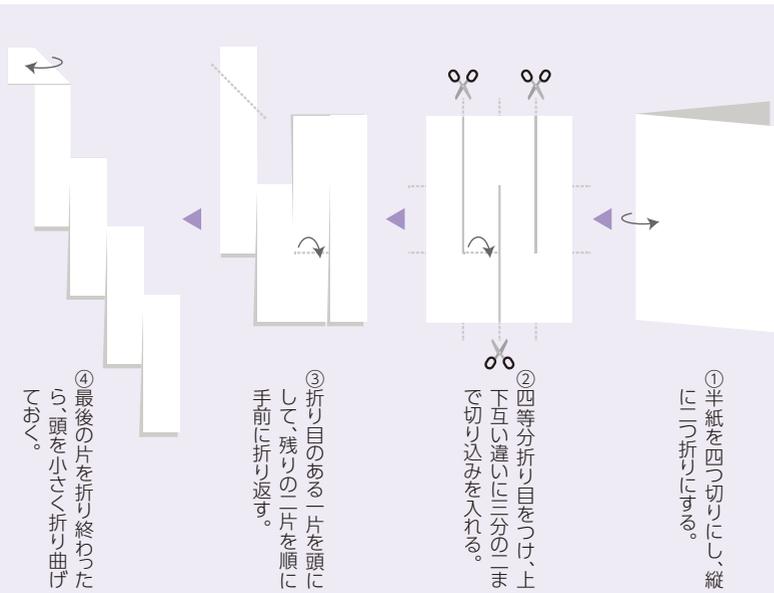
拭紙

手を拭う際に用います。折り方には以下の三通りあります。尚、拭紙は半紙を用います。



コラム

紙垂の作り方



① 半紙を四つ折りにし、縦に折り込む。

② 四等分折り目をつけ、上下互い違いに三分の二まで切り込みを入れる。

③ 折り目のある一片を頭にして、残りの二片を順に手前に折り返す。

④ 最後の片を折り終わったら、頭を小さく折り曲げしなぐ。

敬礼作法について

四十五度 お祓いを受けるとき

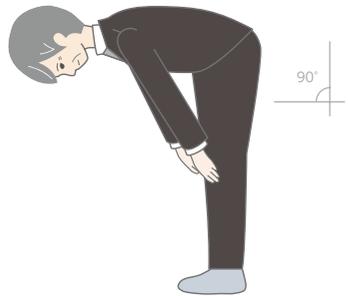


立って行う場合

六十度 祝詞が奏上されているとき



九十度 拝礼を行うとき



座って行う場合



玉串拝礼について

①玉串は右手で枝の根元を上からとり、左手は葉の裏側からとり、胸の高さで左高に捧げ持ちます。



②玉串の先を時計回りに九十度回します。左手を下げて根元を持ち祈念をこめます。



③玉串の先をさらに時計回りに回し根元を神様の方へ向けます。



④玉串を案(お供え用の台)にお供えします。



⑤二拝二拍手二拝(一回深くおじぎ)一回深くおじぎの作法にお参りします。



コラム

玉串について

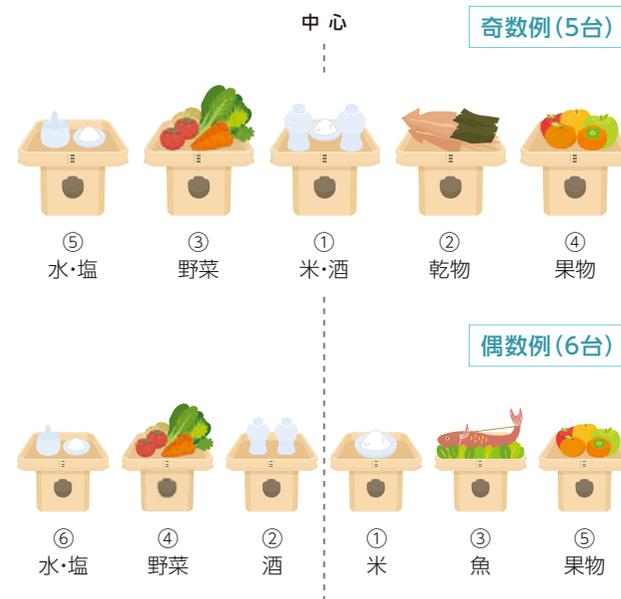
玉串は榊ひまわりの枝に紙垂かみすをつけたものであり、神職や参拝者等が神前に拝礼する時に捧げられます。玉串の由来は諸説ありますが、神霊しんれいが宿る依代よしろであると言われています。玉串を捧げて祈る人の気持ちがかめられることにより、神様とお祈りする人との霊性を合わせる仲立ちとしての役割を果たす供物であるということが言えます。

ご神前に金銭や供物をお供えする際には、表書きに「玉串料」や「初穂料はつほ」、「御神前みかみまへ」
「御供みかみ」等の書き方が一般的です。「玉串料」は玉串の代わりに、「初穂料」はその年に初めて収穫されたお米の代わりにお供えする料であることを意味しています。



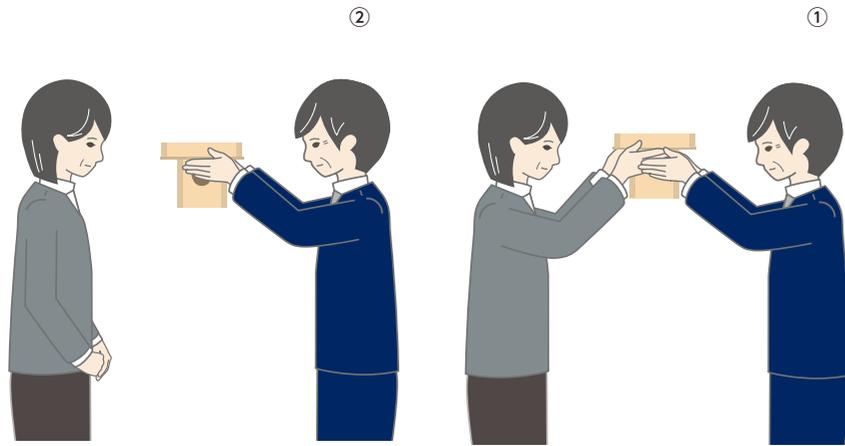
神饌の供え方・下げ方について

神様にお供える食べ物やお酒等を神饌と言います。品目は神社によって異なることはありますが、一般的には米、酒、餅、魚、海藻、野菜、果物、菓子、塩、水等をお供えることが多いです。



台数の合計が奇数の場合は案(机)の中心に1台目を、偶数の場合は中心を挟んで左右に、上記番号の順に供えます。下げる場合は供えた順とは逆に下げます。

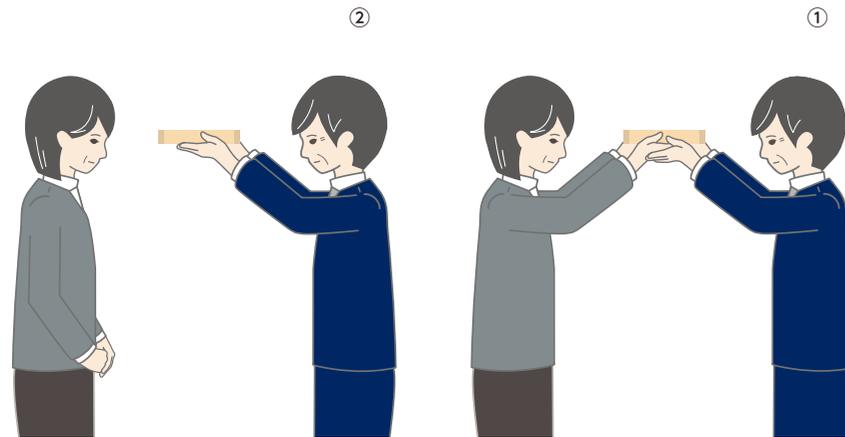
三方の受け渡し方



① 受けるには、左、右の順に手の平を胸に当てて三方の重さを受け止め、親指は縁の外側に当てて、他の四指は揃えて、渡す者の手の甲を斜め下の方から手を覆うようにかけます。

② 渡す者が右、左の順に手を引くと同時に四指の位置を折敷の裏と胸とに移しかえて捧げ持ちます。

折敷の受け渡し方

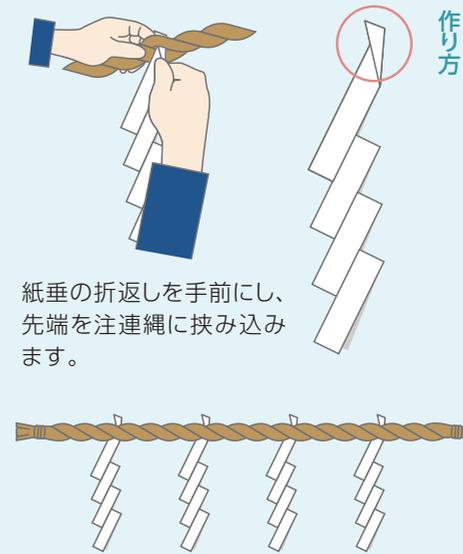


① 受けるには、左、右の順に手をかけ、親指は縁の外側に当て、他の四指は揃えて渡す者の手の甲を下から、交差する形で覆います。

② 渡す者が右、左の順に手を引くと同時に、折敷の裏に手の平を当てて捧げ持ちます。

コラム 注連縄の付け方

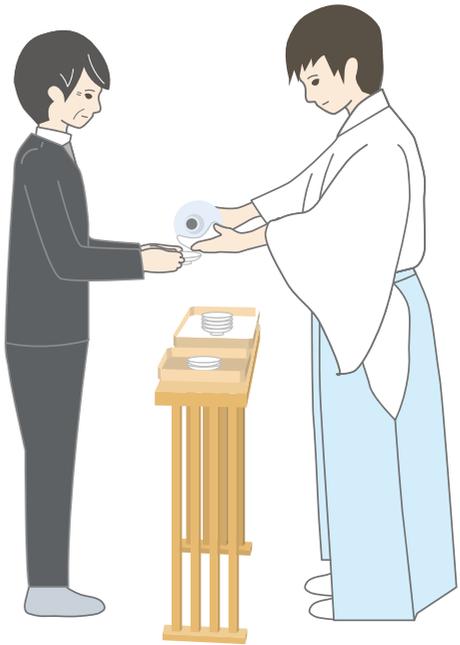
注連縄は神社の社殿や鳥居、御神木、神域、祭場等神聖、清浄な場所を示すために張り巡らす繩のことです。付け方としては、紙垂の上部を図のように折り、注連縄に挟み込みます。お祭りの前や新年を迎える際には、注連縄や紙垂を交換しましょう。



紙垂の折返しを手前にし、先端を注連縄に挟み込みます。

直会なおらいについて

直会なおらいは神様にお供えした神饌や撤下品を奉仕者や参列者が頂戴して神様のご神威を戴くことです。祭典終了後、社務所等で諸員一同集まり、食事やお神酒を頂戴致します。お神酒を受ける時には拍手を一つ行い、盃さかづきを両手に執ってお神酒を受けます。



神宮大麻じんぐうたいま頒布について

神宮大麻は、皇室のご祖先である天照大御神あまてらすおおみかみをおまつりしている伊勢神宮のお神札です。天照大御神は私たち国民の総氏神様であり、そのご神徳は太陽の光のように私たちの生命を守り、育んで下さる神様です。一方地元の土地に暮らす全ての人々と生活をお守り下さる神様を氏神様といい、地域に住む子どもの誕生から成長の過程等日々の生活、地域の安全や平穏を見守って下さる最も身近な神様です。神宮大麻と氏神様のお神札をまつる意味は、より一層のご加護を戴けるからなのです。

総代の役割として神宮大麻の知識を持った上で氏子地域を回ってお神札を拝受して戴くように勧奨します。

頒布する際の心得

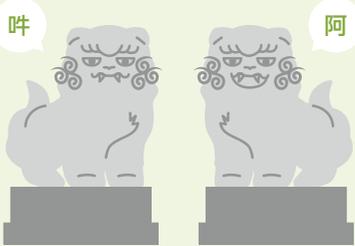
- 清潔にして身なりを整えまじゅう。
- 対応する際は丁寧な言葉遣いで行います。お神札は商品ではありません。数える際は「二体、二体」と数え、売る・買う等の言葉は慎み、丁寧に授与します。
- 神宮大麻は神宮大麻専用の袍や箱、風呂敷等を用意し、「お頒ちする」「受ける」といった言葉を使い、渡す時は折敷や包みの上に神宮大麻を置いて手交する等、丁寧にを行います。

コラム 狛犬こまいぬについて

神社参道の両脇に一对で置かれている狛犬こまいぬの起源は渡来の信仰に基づくもので、邪気を祓う意味があると言われています。一方が口を開ける阿形あぎょう、もう一方が口を閉じる吽形うんぎょうになっていることが多く、これは万物の始まりと終わりを表しているという説があります。

神社によっては狛犬ではなく、狐や牛等の場合もあります。狐は稲荷神社、牛は天満宮に見られ、共にお祀りされている神使しんし(神様のお使い)であるとされています。

狛犬は石製の他、木製や陶製、金属製等があり、その表情は神社、地域によって様々です。



コラム 伊勢神宮いせじんぐうについて

正式には神宮といい、三重県伊勢市に鎮座する神社です。皇室のご先祖の神様である天照大御神をまつる皇大神宮(内宮)と天照大御神のお食事を司る神様である豊受大御神とようけのおおみかみをまつる豊受大神宮(外宮)の両宮をはじめ、摂社、末社等を含わせて百二十五社の総称のことです。

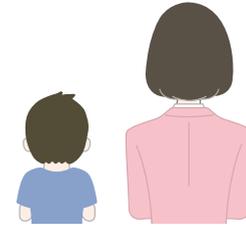
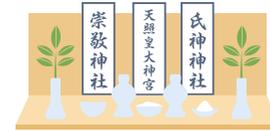
また、二十一年に一度ご社殿やご神宝を一新する神宮最大のお祭りである式年遷宮を執り行います。直近では平成二十五年に六十二回目の式年遷宮が古式のまま執り行われました。



家庭のお祭りについて

家庭の神棚は私たちにとって身近な祈りの場所です。総代として家庭のお祭りについて尋ねられることもあるので正しい知識を持つことが大切です。

神棚は、明るくて清浄な高い所に南向き、もしくは東向きに設けます。原則として毎日米、塩、水等をお供えして、その後神様に日頃の神恩を感謝し、家庭の安泰をお祈りします。その際、神社参拝同様二礼二拍手一礼の作法でお参りします。



横に並べてまつる

三社造りの宮形では、中央に神宮大麻を、向かって右に地元の氏神様のお神札を、向かって左に崇敬している神社のお神札をおまつりします。



重ねてまつる

一社造りの宮形の場合は、神宮大麻を一番手前に、その後ろに氏神様、その後ろに崇敬する神社のお神札を重ねておまつりします。



米・酒・塩・水を供える例



米・塩・水を供える例

お供えの一例

米を中央に置き塩、水の順番にお供えします。酒もお供えする場合は米、酒、塩、水の順番にお供えします。

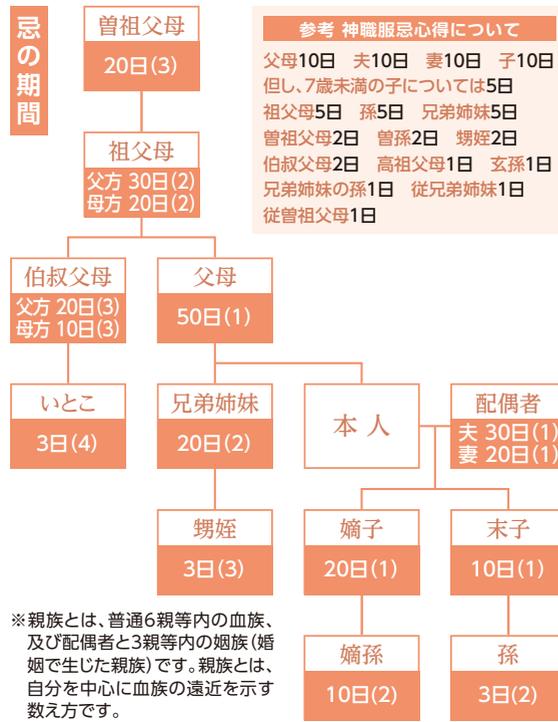
服忌について

服忌とは、親族が亡くなったとき、身内の者が喪に服することです。「忌」と

は故人の祀りに専念する期間、「服」とは故人への哀悼の気持ちを表す期間のことをさします。具体的な期間については地域や職場で慣習的に定められたものがあります。公的には明治政府によって定められたもの（明治七年太政官布告武家制服忌令・左の表）が基本であります。神社へのお参りも心の整理がついてから再開されたら宜しいでしょう。

参考 神職服忌心得について

父母	10日	夫	10日	妻	10日	子	10日
但し、7歳未満の子については5日							
祖父	5日	孫	5日	兄弟姉妹	5日		
曾祖父	2日	曾孫	2日	甥姪	2日		
伯叔父母	2日	高祖父	1日	玄孫	1日		
兄弟姉妹の孫	1日	従兄弟姉妹	1日				
従曾祖父	1日						



Q & A

Q 氏子の服忌について教えてください。

A 地域差はありますが、一般的には五十日祭(仏教の四十九日に相当)までが忌の期間で、一年祭までが服の期間と考えられています。

Q 忌中間中の神社参拝について教えてください。

A 期間中は神社の参拝を遠慮しますが、やむを得ない場合はお祓いを受けて下さい。

Q 忌中間中の神棚のお祭りについて教えてください。

A 期間中は神棚の前面に半紙を貼り、毎日のお祭りは控えます。地域差はありますが、一般的には五十日を迎えたら、忌明けとしてお祭りを再開します。



Q 新年に新しいお神札を受けても良いのでしょうか。

A 神棚は毎年新しいお神札に交換するのが本義なので、忌の期間を過ぎればお神札を受けても差し支えはないと思います。もし、年末年始が忌の期間に重なる場合は、忌明けの後に神札を受けて下さい。